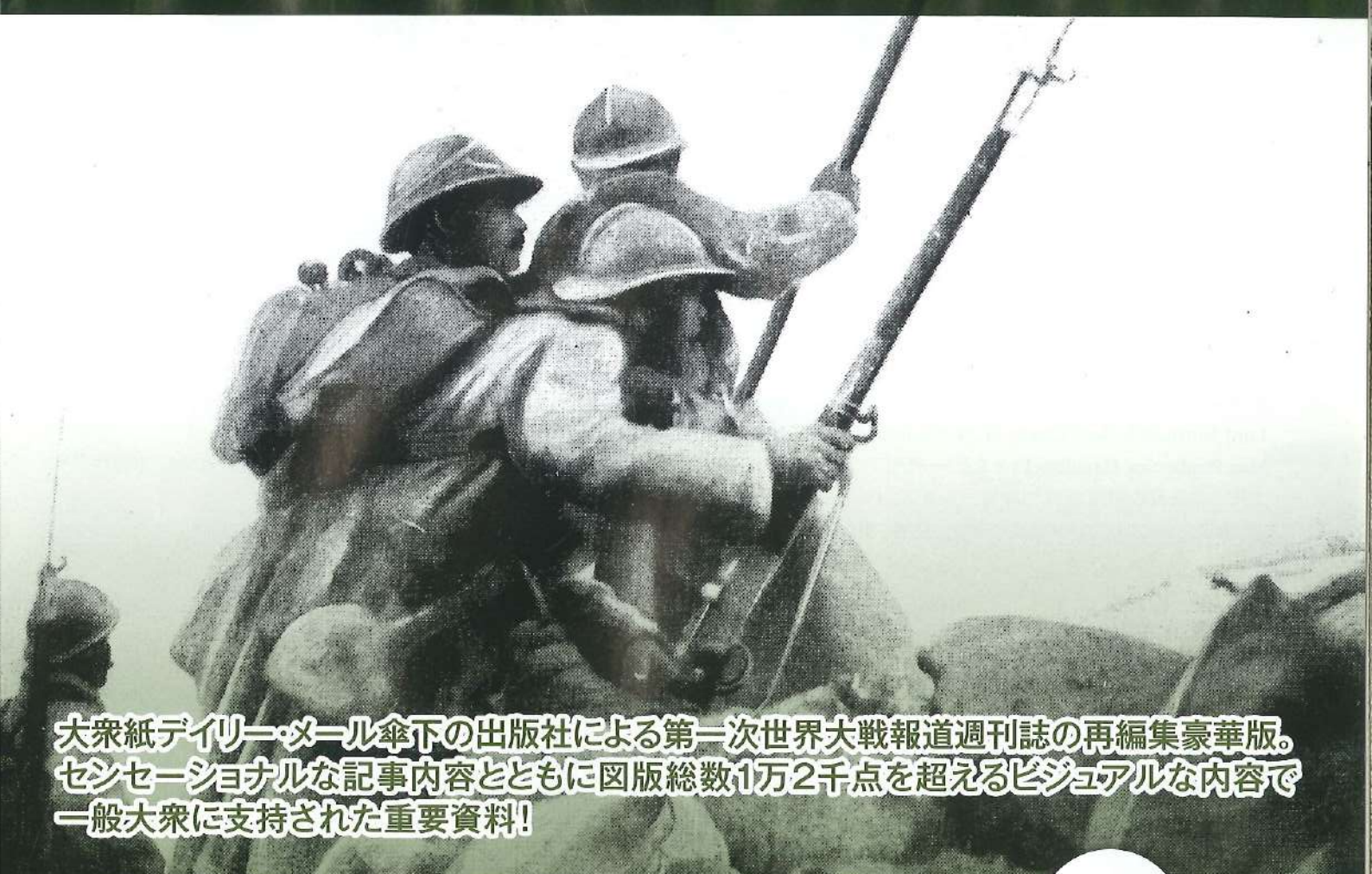


ATHENA SOURCES IN THE HISTORY OF WORLD WAR I

# THE WAR ILLUSTRATED: ALBUM DE LUXE

The Story of the Great European War Told by Camera, Pen and Pencil



大衆紙デイリー・メール傘下の出版社による第一次世界大戦報道週刊誌の再編集豪華版。  
センセーショナルな記事内容とともに図版総数1万2千点を超えるビジュアルな内容で  
一般大衆に支持された重要資料!

定価 本体 285,000円+税

ISBN 978-4-86340-160-0 • c. 3900 pp. • A4判

全10巻  
分売可

**Part 1: Volumes 1-2** (1914-1915) ISBN 978-4-86340-175-4 • c. 780 pp. • 定価 本体 57,000円+税

**Part 2: Volumes 3-4** (1915) ISBN 978-4-86340-176-1 • c. 780 pp. • 定価 本体 57,000円+税

**Part 3: Volumes 5-6** (1915-1916) ISBN 978-4-86340-177-8 • c. 780 pp. • 定価 本体 57,000円+税

**Part 4: Volumes 7-8** (1916-1917) ISBN 978-4-86340-178-5 • c. 780 pp. • 定価 本体 57,000円+税

**Part 5: Volumes 9-10** (1917-1919) ISBN 978-4-86340-179-2 • c. 780 pp. • 定価 本体 57,000円+税

Athena Press

## The War Illustrated: Album de Luxe (1915-1919) について

*The War Illustrated: Album de Luxe* (以下 *WI*) はデイリー・メール系刊行物の Amalgamated Press から出版されました。編集者 John Alexander Hammerton はよく知られた人物です。本体のデイリー・メール紙がそうであるように、取り上げるニュースやそのコメントの刺激的な内容で大衆的な読者層を獲得していた *WI* は、シリーズ *Athena Sources in the History of World War I* で扱う *Illustrated War News* (以下 *IWN*)、*The "Manchester Guardian" History of the War* (以下 *MGHW*) いずれとも明らかに異なる性格を持っています。

*WI* のオリジナルは 1914 年 8 月から 1919 年 2 月にかけて、一般大衆に戦争の最新情報を即座に伝えようと、多くの図版を載せて出た週刊誌で、価格を抑えるために安い紙が使われていました。これが好評を得たことで、上質な紙を用いて別途刊行された「豪華版」(album de luxe) が本書です。もともとの「速報誌」的な内容が修正、再編成されて、文章と図版類が追加されました。特に図版は充実、その数は一万二千点以上に上ります。

*IWN* と *MGHW* の記事執筆者のほとんどは無記名ですが、*WI* の記事の多くは署名付きで、有名な作家やジャーナリストの名前も多く見られます—— H. G. Wells, Arthur Conan Doyle, Arthur D. Innes, Gilbert Parker, Marie Corelli, H. W. Wilson, Cicely Hamilton, Lord Northcliffe, Basil Clarke, H. W. Nevinson, Arthur Machen, Max Pemberton, Hamilton Fyfe など——。

こうした執筆者のうち、ノースクリフ卿、ウェルズ、パーカーらが、戦時中に英国政府のプロパガンダ組織で重要な役割を果たしていた事実は

本書の性格を考える上で極めて重要です。

アルフレッド・ハームズワース(のちにノースクリフ卿 Lord Northcliffe) は以前からドイツの軍備を警戒して対抗措置を訴え続けており、自身が社主を務めていた二つの新聞デイリー・メールとタイムズの紙面は、彼の政治的主張が色濃く表れていました。イギリスの戦争政策に強い主張を持っていたハームズワースは 1917 年、アメリカ参戦を促す任務の先頭に立ち、その後 1918 年に新たに設立された情報省の敵国向けプロパガンダを行う部局の長に任命されています。

ウェルズ H. G. Wells は、開戦直後より政府組織から文章やパンフレットの執筆依頼を受けており、敵国向けプロパガンダ、特にドイツに対してのプロパガンダに精力を注いでいました。またカナダ出身の作家パーカー Gilbert Parker も早くからアメリカ向けのプロパガンダを担当し、アメリカ参戦を導く重要な役割を果たしました。

このように戦時下で出版・文筆業界の果たした役割はかつてない大きなものとなり、特にこの *WI* のようなプロパガンダ色の濃い出版物は、戦争を正当化し兵隊の徴募を促進するうえで極めて中心的な役割を果たしました。国家全体のモラルの強化、反戦論者や敵のプロパガンダへの対抗、銃後女性の労働促進、男性の積極的な戦地赴任、そして合衆国への参戦説得などへの効果も期待されていたのです。

戦争・国家・メディアの関係を考える現代的課題の上でも、本書は非常に重要な資料なのです。

### ■ 本書の内容

- ヨーロッパ全域に加え大英帝国管内での軍事展開、「銃後」の状況、戦時中の女性の役割と労働、各種の部隊、勲章、連合国軍の英雄行為などについて章立てされて構成。
- 地図、写真、戦争画家によるスケッチや絵画など、多様な大量の図版収録。総数12,000点以上。
- 各巻末に日々の戦局を表にした“Diary of the War”が付録、1919年6月28日のヴェルサイユ条約調印まで記載。

### ■ 項目具体例

**General / Various:** Why Britain Went to War (H. G. Wells) • How the Boer War Prepared Us for the Great War (Arthur Conan Doyle) • With the Camera in the War-Stricken Countries • Dogs and Birds That Help the Allied Armies • Scenes of Japan's Activity in the World War Taken at the Actual Capture of Tsing-Tau • Footballers to Play the Greater Game • Wily Wheeled Warriors: Cyclists in Training • Sports and Pastimes near the Firing-Line • Royal Academy Pictures of the Great War • The Horrors of the Poison War • The Shooting of Nurse Cavell • The Fall of Warsaw: The Eclipse of Russian Poland • Armenians Fight with Russia in Asia Minor • The Death and Resurrection of the Foreign Legion • Is It a Capitalist War? • America's Roaring War Trade • The Twenty Best War Poems (William Robertson Nicoll) • Army Dogs' Headquarters • Rebuilding Ruined Lives (Lady Jellicoe) • Scenes in the Tracks of the Sinn Feiners • Camels Travelling to the Front by Train • Japan's Soldiers as I Know Them (F. A. Mackenzie) • The British Flag over Bagdad • French Honours for American Fighting Heroes • Allies' Activity against Bolshevist Anarchy, etc.

**British Empire:** United Ireland: A New Source of Strength to the Empire • Fervent Loyalty of the Indian Princes • Terror by Night: The Gurkhas at Work • Boer and Briton Unite against the Teuton • Indian Heroes from Trench to Breezy Brighton • There is No Colour-Line in the Battle-Line • Planting the Union Jack in German Africa • How Botha Saved the Union in South Africa • Britain's Conquest of the German Cameroon • With the Canadians in Camp and Trench, etc.

**The "Home Front":** Will the War Change England? (H. G. Wells) • Workers and "Shirkers" (Marie Corelli) • "His Majesty's Dockers": Workers in Khaki • New Garden City for Woolwich War Workers • The Manless Homes of England (Cicely Hamilton) • The War and Our National Life, etc.

**Women:** Woman's Healing Work among the Wounded • War's Diverse Effects on Feminine Temperament • Women Serve the Country in Munition Factories • War and the Real Triumph of Feminism • Some of the Women behind the Guns • Crèche for Women Munition Workers' Children • Women's Rural Activities • Women of the Allied Nations on War Work • Daughters of Empire in Diverse Employments, etc.



# ATHENA SOURCES IN THE HISTORY OF WORLD WAR I

史上かつてない規模と様相を呈した第一次世界大戦開戦から100年という歳月が巡ってきています。アティーナ・プレスではこの現代のあり方に大きな影響を及ぼした戦争を伝えた同時代資料を復刻刊行してまいります。

それぞれ異なる視点や論点から編集されている4点の資料を扱います。いずれも戦時中の貴重な写真、地図、戦争画、ポスター、風刺画など、全体として数万点を数える大量の図版類を収録。ヨーロッパのみならず、中東、アフリカ、インド、極東アジアの戦線の状況が伝えられ、加えて戦時下の女性、ロシア革命、アイルランド問題、イギリスの植民地と連邦自治領などの問題にまで記事のテーマは広がり、第一次世界大戦の複雑な因果関係を織りなす各種要素がそれぞれ扱われています。

さらにこれら報道資料が、戦争の情報を伝える役割とともに、戦争の宣伝、プロパガンダの道具としての役割を持っていたことは重要な側面です。

2013年記本開始！ イラストレイテッド・ロンドン・ニュースが刊行した第一次世界大戦特集。

## The Illustrated War News Being A Pictorial Record of the Great War (1914-1918)

8回配本 全16巻・各配本定価 1-4回：本体 95,000円+税 / 5-8回：本体 86,000円+税

2013年刊行！ ガーディアン紙の戦争特集号。

## The "Manchester Guardian" History of the War (1914-1920)

全9巻・定価 本体 270,000円+税(分売設定あり)・ISBN 978-4-86340-148-8

2014年刊行！ デイリー・メールの出版グループによる大衆向け週刊誌の再編集愛蔵版。

## The War Illustrated: Album de Luxe The Story of the Great European War Told by Camera, Pen and Pencil (1915-1919)

全10巻・定価 本体 285,000円+税(分売設定あり)・ISBN 978-4-86340-160-0

2015年刊行！ 戦後およそ20年後に出された戦争体験談集。週刊全51号。著名人も多数。

## The Great War ... I Was There! Undying Memories of 1914-1918 (1938-1939)

全6巻・定価 本体 168,000円+税(分売設定あり)・ISBN 978-4-86340-161-7



【発行】

Athena Press

株式会社 アティーナ・プレス



〒112-0011 東京都文京区千石4-33-18

Tel: 03(3946)2117 Fax: 03(5977)8026

E-mail: eigyo@athena-press.co.jp

http://www.athena-press.co.jp

【取扱書店】

## 鮮やかに浮かび上がる 大戦の諸相

木畑 洋一 ● 成城大学教授

1914年から18年にかけて戦われた第一次世界大戦は、ヨーロッパの国々に深い傷跡を残した。イギリスやフランスでは、この大戦で後の第二次世界大戦よりもはるかに多い犠牲者が出たのである。現在でも「大戦争」(the Great War, la Grande Guerre)と呼ばれて追憶されることが多い所以である。第一次世界大戦には日本も参戦したが(中国や南太平洋でのドイツ領を攻撃、占領した)、犠牲が小規模にとどまったこともあり、第二次世界大戦と異なり、この戦争は日本人の歴史的記憶の中にはほとんどとどまっていない。それだけに、この戦争について具体的なイメージを抱くことは、容易でない。今般アティーナ・プレスから出版されるこの四種類の資料は、中心的な参戦国であったイギリスで、大戦中に戦争の姿がどのように捉えられ、どのように報じられていたかを多面的に示しており、この戦争についての私たちのイメージを非常に豊かなものにしてくれる。

今回出版される資料の内、最大のものは、*The Illustrated War News* である。1842年に刊行が開始され、イギリスおよび世界の状況を絵や写真で報じた *The Illustrated London News* がいかに豊富な内容を備えていたかは、日本でもすでによく知られているが、これはその出版社が大戦に焦点を絞って週刊で刊行した雑誌である。イギリスの参戦が1914年8月4日で、この本の第1号は8月12日付けで出されているから、開戦にすぐに対応したことが分る。巻頭に若干長い文章が掲載されている以外は、写真や絵がぎっしりとつまっていて、頁を繰っていくと、戦場の多様な光景をカメラや絵筆で伝えようとした戦場報道家の熱気が伝わってくる。対象となっている兵士は、やはりイギリス軍が一番多いが、フランス兵はじめ他国の兵士も扱われている。戦う兵士だけでなく、戦闘の合間に遊ぶ兵士(たとえば戦艦の甲板でのクリケット風景)の姿も捉えられている。筆者の研究関心との関わりでは、イギリス軍に加わったインド兵や、フランス軍に参加したアフリカ兵、安南(インドシナ)兵など、植民地から動員された兵士の姿が、豊富に示されていることが、きわめて印象的である。アジア・太平洋での日本の戦争については、報道量が限られているものの、大戦の重要な側面であっ



たアフリカ(カメルーンや東アフリカなど)での戦争は、筆者が予想していた以上によく報じられている。

総力戦となったこの大戦では、「統後」の役割がきわめて重要であったが、その様相も見ることができ、敵側のクルップ社の大砲生産現場の写真さえ掲載されている。この面で特筆すべきは、総力戦体制への女性の貢献を反映して、「女性と戦争」という写真入り記事が継続的に載せられていることであろう。また、飛行機から写した空爆前後の地上風景のように、それまでの戦争では考えられなかった映像も盛り込まれている。破壊された人々の肉体など戦争の残酷な相貌はほとんど出てこないものの、この雑誌は第一次世界大戦についての視覚的資料の宝庫であるといつてよい。

それに対して、*The "Manchester Guardian" History of the War* は、写真も含みつつ文章を中心として戦争の諸側面を詳しく説明した本であり、1914年を扱った第1巻から1919~20年を対象とした第9巻までの9冊から成っている。各戦線での戦況の記録が中心であるが、ここでも植民地の戦争協力や女性の役割は取り上げられている。アイルランドの「イースター蜂起」やその後の状況、ロシア革命などが詳しく論じられていることも、眼を惹く。また、第5巻の「極東での戦争」という章で、日本が中国につきつけた21カ条要求が全文掲載されていることに見られるように、史料への周到な目配りがなされているのも特徴的で、章の付録という形で史料が付加されている箇所もある。

この本が、*Manchester Guardian* 紙の政治的傾向を反映して、比較的リベラルな視座から戦争を描いているのと対照的な雑誌が、大衆紙 *Daily Mail* 傘下の出版元から出された *The War Illustrated: Album de Luxe* である。小さな活字で組まれた署名入りの文章(第1号の巻頭には、「なぜイギリスは参戦したか」というH.G. ウェルズの文章が載り、コナン・ドイルの文章がそれにつづいている)と、多くの写真や絵から成っているこの週刊誌は、ドイツ兵を指して「フン」という蔑称を多用するなど、保守的、排外的色彩を露骨に見せている。こうした論調が、戦時のイギリスの大衆に受けたことを、忘れてはならない。

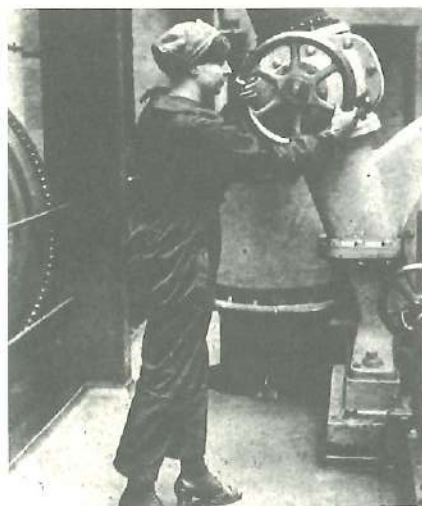
これと同じ出版社、編集者によって刊行された *The Great War ... I Was There!* は、以上の三つとは異なり、大戦期ではなく、大戦が終わってから20年後に週刊誌として出された雑誌である。第1号の刊行日1938年9月29日は、チェコスロヴァキアのズデーテン地方割譲をめぐって英仏などがヒトラーに譲歩したミュンヘン会談の日には他ならない。この雑誌は、次の戦争が迫っているのではないかという予感を抱きはじめてイギリス人に、第一次世界大戦の一日一日についての人々の記録や回想によって(たとえば、1914年の開戦の日については、外交官ハロルド・ニコルソンの文章が採られている)、「戦争についての人間的記録」を提示しようとしたのである。この雑誌の刊行終了が告げられたのは、1939年9月19日号であり、9月初めに開始した次の戦争に人々の意識を動員するために新たな歯車が回り始めた時であった。

このように、四つの資料は、同じ大戦を対象としていても、それぞれ内容構成も戦争への視角も異なり、対象となった読者層にもずれがあったと思われる。一つ一つの資料をひもといっていくことも興味深い。戦争のさまざまな側面について各資料を比べながら読んでみることもまた有益である。この四つの資料を選んで刊行することを決断したアティーナ・プレスに、敬意を表したい。

## 第一次世界大戦とイギリス女性作家たち

河内 恵子 ● 慶應義塾大学教授

第一次世界大戦はイギリス女性作家たちを強力に魅了し続けてきた。それは、この戦争がイギリス国民の、とりわけ女性たちの生きかたを



大きく揺さぶったからであろう。家父長制度を守ろうとする保守的な女性たち、それに反してさまざまな場面で自立を求める「新しい女」たち、過激な活動も辞さない婦人参政権論者、過酷な条件の下で不満を押し殺して生きる労働者階級の女性たち—19世紀末から20世紀初頭

のいわゆる世紀転換期を生きていたこれらの女性たちは、戦争という巨大なエネルギーのなかで一様にそれまでの生きかたを変えることを強いられる。男たちが戦地に赴いた後、バスやトラックを運転し、工場や兵器を生産し、軍服や防毒ガスマスクを縫い、農地を耕作したのは女たちだった。このように国内（ホームフロント）で働く者もいれば戦地（ハトルフロント）にて救急車の運転手や看護婦として活動する者もいた。ヴィクトリア朝時代の根幹であった階級制度は崩れ、女性たちのあいだに一体感や平等意識が生まれた。いや、急いで付け加えれば、戦争観を軸にした新しい階級地図が出現した。

作家たちはこの新しい地図のありかたを鮮やかに描きだしている。当時の大人気作家 M. コレリーは戦争支持を強く主張した。平和主義の立場を買った V. ウルフは新しい手法を駆使して戦争の虚しさを捉えた。大学を中退して恋人を追って戦地に赴き、そこでの看護活動体験を具に記したのは V. プリテンだ。R. ホールは同性愛者の生を戦争を背景に描写した。誤解を怖れずに言うならば、戦争は多様性に富む文学を創り出したのだ。そして、この「第一次世界大戦文学」は現代では P. パーカー、S. ヒルといったきわめてすぐれた作家たちによって展開されている。

この度復刻された新聞資料を見たとき、「写真とペン」の力がそこにあることを認識した。それは当時を生き、書いた女性作家たちと現在を生き、第一次世界大戦を書く作家たちの世界が私のなかで結びついた瞬間だった。

## 第一次世界大戦とイギリス政治

小関 隆 ● 京都大学准教授

第一次世界大戦（以下では大戦）期のイギリス内政が抱える最大の懸案はアイルランド問題であった。ナショナリストの宿願であったアイルランドへの自治権付与は実現目前に漕ぎついていたが、アルスター地方を拠点とするユニオニストが強硬な反対の姿勢をとり、イギリス政府による妥協の模索が功を奏さない中、双方の義勇軍も設立されて、内戦の勃発を危惧する声もあった。いわゆる「7月危機」の最中にも、世論の関心はヨーロッパ大陸よりもアイルランドに向けられた。大戦の勃発は情勢を一変させる。ナショナリスト指導者が戦争協力方針を打ち出したこともあり、約20万人のアイルランド人がイギリス軍兵士として従軍するのである。第二次世界大戦の際に中立を保ったアイルランドにとって、大戦は史上最大の戦争であった。今回の復刻資料集に収められた *The "Manchester Guardian" History of the War* は、戦争協力方針の反響や募兵運動の様子からイースター蜂起の衝撃とその余波までを詳細に伝える第一級の資料といえる。特に豊富に添えられた写真は貴重である。

また、*The War Illustrated: Album de Luxe* に掲載されている H. G. ウェルズ「イギリスはなぜ参戦したのか?」は、「戦争をなくすための戦争」(1914年)の著者の思いを端的に表明した文章として実に興味深い。



平和主義を志向する一方で、ウェルズは、「プロイセン帝国主義」を打倒し、「狂気を払い浄める」ために、大戦という「平和のための戦争」を熱烈に支持した。「最後の戦争」「戦争をなくすための戦争」といったフレーズはイギリス国内の反戦主義を封じ込めるうえで力を発揮したが、次なる世界大戦が惹起されたことを知る私たちの耳には痛みをもって響く。

開戦100周年を控えた今、大戦を知るうえで有益な資料を他にも数多く収録するこの復刻資料集が広く読まれ、大戦認識の深化を促すことを期待したい。

## よみがえる第一次大戦期のまなざし

立野 正裕 ● 明治大学教授

二十世紀の運命を決定することになった第一次大戦開戦から、ちょうど百年という歳月がめぐって来ている。当時の定期刊物など多くの第一次資料が、海外現地の図書館や資料館に出かけなければ参照できず、研究者たちは長いあいだ隔靴搔痒の思いを禁じ得なかった。アティエナ・プレスの意欲的で良心的な企画により、順次刊行される運びとなった第一次大戦資料集は、この渴を大いに癒してくれることだろう。

たとえば『マンチェスター・ガーディアン』紙による別冊『戦史』シリーズ全九巻(The "Manchester Guardian" History of the War, 9 vols.)などは、とくに興味深い資料と言わねばならない。同紙は現在の『ガーディアン』紙の前身にあたるが、当時から大衆におもねらず、つねに公平と質の高さを目ざしてきた。編集責任者のC・P・スコットを始め同紙の記者たちは、英国が中立の立場を取ることを開戦前は主張した。同紙が政府擁護に転じたのは開戦後のことである。すなわち当時の戦争の熱狂とそれに迎合する多くのジャーナリズムのなかで、相対的にてはあれ、戦争の推移を客観的に見ようと努めたほとんど唯一のジャーナリズムが同紙だった。

その格調の一端を示す一文が、一九一六年刊行の同『戦史』第四巻のなかにも見られる。「戦争詩人」ルパート・ブルック(1897-1916)の夭折を悼み、その詩を考察した次のようなくだりだ。

「他人の命を軽視するのは厭うべきことだが、理想のため自らの命を軽んじるのは人間精神の高さの勝利であつて、あらゆる道徳的良心と名誉を支持することである。ブルックの五つの詩に鳴り響いているのは、個人としての魅力を受け入れた人間の喜びである。これらの詩編は人間の魂にじかに呼びかける。際物としての魅力をきっぱりと乗り越え、愛国主義の絶頂さをも超越する。」

ブルックはドーダネルス海峡作戦に従軍の途次、エーゲ海で病没した。享年二十七歳だった。その生涯と詩の意義を、他の戦争詩人たちのそれとともに、同時代と現代の両方の視点から再考しなくてはならないと考えているわたしのそのような研究者には、このような視点はきわめて重要な意味を持つものだ。なぜなら、同時代のジャーナリストによって示されたその真摯さと真剣に向き合つてこそ、現代からの視点をはじめて可能になるからである。



## 記録に複数の記憶を重ねる

—復刻資料を読む醍醐味

井野瀬 久美恵 ● 甲南大学教授



An Indian Camel Corps. A Camel Corps from Bikaner is included in the Indian Expeditionary Force. (British Army)

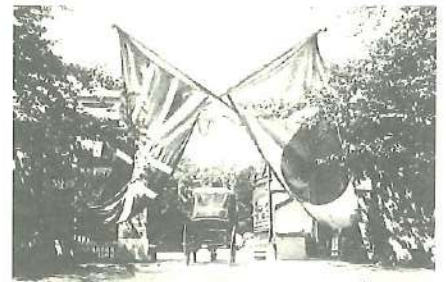
第一次世界大戦は帝国の戦いであった。それを喧伝したのは新聞、雑誌を中心とするメディアであった。今回復刻された *The "Manchester Guardian" History of the War* のページを開けば、ターバンを巻いたインド騎兵、ラクダにまたがって一列に並んだピカネル [インド北西部] の部隊、豪華に着飾ったマハラジャ父子といった写真がつつぎと飛び込

んでくる。当初、ヨーロッパで何が起こったかが飲み込めなかったインド現地の上層部が、帝国の大義のために続々と立ち上がる様子を記事は伝えているが、そこ

でも目を惹くのは、「典型的なシク教徒」「典型的なベンガル騎兵」などのキャプションに彩られた写真である。ニュースの視覚化——それにしても、この既視感は何だろう？

この問いは、新聞読者だった(あるいは読者と想定された)当時の「白いイギリス人」がこれらの写真に何を見たかへと向かい、そこにある出来事を思い浮かべる。1897年6月、帝都ロンドンの通りを各植民地軍隊が練り歩いたヴィクトリア女王即位60周年式典(ダイヤモンド・ジュビリー)だ。「われわれの国土は世界の隅々にまで広がっている」と多くの国民に実感させた王室儀礼の記憶は、当時まだまだ鮮やかだっただろう。そう教えるのは、われわれ同時代の記憶、2012年6月に行われた現英国君主エリザベス2世のダイヤモンド・ジュビリーである。

ひとつの記憶は別の記憶を刺激する。こうして、われわれの記憶は幾重にも重なり合いながら、「歴史的事実」を作りあげてきた。そこに生まれる誤解や曲解(の可能性)を意識して、写真と言説で再構成された「この戦争」を読む——復刻された歴史資料の醍醐味もまた、まさにそこにある。



## 女性は大戦をどう生きたのか

～「銃後の戦い」をあぶりだす貴重な史料～

林田 敏子 ● 摂南大学准教授

戦争中ほどジェンダーの境界が強く意識される時代はない。武器をとって戦うことが絶対的な価値をもつ戦時にあって、「戦えない」性である女性は、平時以上の周縁性をまぬがれないからである。しかし、第一次世界大戦が国民を広く巻き込んだ総力戦であったことを踏まえるならば、銃後を生きた女性への着目は大戦の全容を明らかにする上で不可欠であるといえる。

このたび、「Athena Sources in the History of World War I」として復刻される史料はいずれも、イギリスの主要紙が手がけた定期刊行物で、豊富な写真と網羅的なピック、女性を含む豪華な執筆陣を特徴としている。たとえば、そのなかの一つ *The Illustrated War News* の New Series には、「女性と戦争」と題する一連の特集記事が組まれており、非戦闘員である女性に対する関心の高さがうかがえる。

大戦中、多くの国では女性に兵士としての資格を与えなかったが、前線には、負傷兵の救護にあたった赤十字部隊や、後方支援活動に従事した陸軍女性部隊など、少なからぬ女性の姿があった。また、銃後の世界においても、女性は出征した男性の代替労働力となることを



期待された。その職域は、伝統的に「男の仕事」とみなされてきたバスや路面電車の車掌、ポーター、郵便配達といったものから、農地や炭鉱での肉体労働、熟練技術を要する工場労働や一部専門職にまでおよんだ。

兵士になるか、ならないかという選択肢しかもちえなかった男性に対し、「兵士になれなかった」女性の前には、戦前とは比べものにならないほど多くの選択肢が存在した。前線から銃後まで、大戦の実相を活写したこれらの史料は、女性たちの多様な大戦経験をあぶりだす上で、貴重なツールとなるに違いない。